
時の種族-Khronos Tribe-

フィーカス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時の種族 - K h r o n o s T r i b e -

【Nコード】

N 4 2 7 1 P

【作者名】

フーカス

【あらすじ】

時間というものは、止まることがなく、戻ることがなく、飛び越えることがなく、消すことが出来ない。主人公である栗塚聖也は、クロノストライプ”時の種族”という種族に出会い、様々な経験を通していくことで、時間というものの大切さを知ることになる。……連載小説ですが、連載が長期停止する可能性が。

時止めの調整 その1（前書き）

普段過ごしている時間。そんな時間は無限のようで有限なものです。まるで空気のように、大切だけど当たり前前に過ぎていく概念。それが時間です。

いろんな小説では、時間が戻ったり、時間が止まったり、未来に行ったり、過去に行ったりと、時間がいろんな方法でいじられています。でも、よく考えると「それって、一体どういう状態なのだろう？」と思うのです。

時間は、どんな生物にも平等に与えられた大切な資産。そんな時間の大切さを、感じながら読んでもらえれば、と思います。

特にそのようなことを感じられるのは、物語が進んでから、となりそうです。

……とは言つものの、作者自身が時間をムダに過ごしているので、あまり説得力がないのですが（汗

時止めの調整 その1

「時間」という概念は、ただ一定に、一方的に進んでいくだけのものだ。決してゆっくり進んだり、早く進んだり、ましてや止まったりなどはしない。そう思うのは、ただそう感じているだけだ。

幼い頃の時間と言うものは、どうしてかゆっくりと感じられた。朝起きて、学校に行くまでの準備の時間も長く感じた。徒歩5分の通学路さえ、ちよつとした冒険に感じた。45分という、今では短いとも思える授業時間も長く感じた。そして、友達とは、永遠とも思えるほど長い時間遊んだようにも思える。

今となつては、1日なんて刹那の刻だ。朝起きたら、いつの間にか学校や会社にたどり着く。気がついたらお昼休み、そして帰宅の時間。帰って寝るまでの安らぎも、一瞬の出来事だ。

それでも、すべての人には同じ時間が、一定の速さでやってくる。どうしてこんなにも時間の長さが違って感じるのに、その時間の長さは、それぞれの人で等しいのだろう。

実際に、そういった研究結果も報告されている。体感時間は、成長するにつれて早くなつていくらしい。80歳まで生きるとして、体感時間では18歳頃が折り返しなんだとか。そうやって、人はそれぞれの感覚で、時間の早さを感じている。

人が夢見ること。「このまま時間が止まってしまえばいいのに」。「過去に戻れればいいのに」。「永遠に生きたい」。時に対する人の欲望は、とどまることを知らない。だが、どれもこれも、時間と言う概念の前ではとても叶いそうにない。何故なら、「時間」という概念は、ただ一定に、一方的に進んでいくだけのものだから。

第一章 時止めの調整

夕方5時を回り、下校のチャイムが鳴り響く。これを合図にして、

学校の生徒は一斉に家路に着く。とはいっても、こんなにも遅い時間まで残っているのは、せいぜい部活生や一部の勉強熱心な生徒くらいだ。多くの生徒は、帰りのホームルーム終了と同時に帰ってしまう。

時間の移り変わりは、何も時計だけで示されるものではない。昼間、静かで穏やかなここの時渡町ときとぢょうの風景も、夕方ともなると、平日でも街の道は学校や会社から帰宅する人、買い物をする主婦で賑わう。徐々に沈み行く夕日が照らす街並みの中、遊びの約束をしたり、世間話をしたり、あるいは次の仕事の会話をしたりする声が聞こえる。

ただ、それらは注意して聞かなければただの雑音であり、おそらく帰宅すれば忘れてしまうような、自分にとっては些細なことだろう。7月の夏空は、こんな時間になっても青い。確かに過ぎていく時間も、まるで止まっているようだ。だが、ある時間を過ぎると一気に暗くなる。そこで、やっと時間の流れというものを感じるということもあるだろう。

「さて、帰って何をするかな……」

永遠に続くと思われる青空の下、太陽の光が照り返す夏の道路を帰宅する男子生徒、栗塚聖也くりづかせいやも、街の雑音を演出する一人だった。中学時代は音楽部に所属していたが、現在通っているとき渡町立時渡高校に入学してからは特に部活動は行っていない。俗に言う、「帰宅部」というやつだ。

こんな時間まで学校に残っていたのは、単に友人とゲームについての雑談をしていたからだ。次のイベントはこうだ、ボスはこういうふう倒せばいい、そんな会話を毎日やっていた。今日は友達と遊ぶ約束をしておらず、早速仕入れた情報を用いて、ゲームの攻略に取り掛かるうとしていたところだった。

人は変化がなければ退屈するものだ。こんなにぎやかな街も、慣れてしまえば退屈な街だ。ゲームセンターに行くにも、今月はお小遣いがもうなくなりかけている。そんな無駄な金をかけるくらいなら、家で電気代だけで済む家庭用ゲーム機で十分だ。もっとも、そ

の電気代も親が払っているわけだが。

赤信号の前で立ち止まる。目の前には行きかう人々。いつもの光景。こうして毎日を浪費していると考えたと、なんだかもったいない気がする。だが、こうして毎日を浪費していかなければ、退屈な時間が待っているのだろう。そもそも、いつもの光景を「浪費」とたどるのが間違えなのかもしれないが。

「とりあえず、ボスでも倒しておくか」

聖也は、やりかけのゲームの続きが気になっていた。レベルが低すぎるのか、武器が弱すぎるのか、とにかくなかなか倒せない中ボスを倒すため、しばらく経験値稼ぎをしていたのだ。いい加減、帰って即経験値稼ぎ、という作業が面倒になっていた。だが、今日仕入れた情報を元に、今日こそはボスの攻略を、と考えていた。

そんなことを考えながら信号を待つ。が、なかなか変わらない。最近、赤信号がやたらと長く感じる。特にここの大通りの信号は、車の交通量上、他の信号機と違ってより長い時間信号が変わらないのだ。

「たしか、あのアイテムを使えばよかつたんだよね……」

こんなときは、別のことを考えることが一番だ。まずはボスを倒すための情報整理。それを行うための段取りと、そのあとの展開。そして、今日出された宿題。そう、高校では中学とは比べ物にならないほどの宿題の山が待っているのだ。

「ああ、宿題があつたな……。まったく、今日に限ってこんなに大量に宿題があるなんて。せっかくボスを倒す方法がわかったのに。どうせなら、ゲームをやっている時で時間が止まってしまえばいいのに……」

勉強は学生にとっての仕事、と言われるが、学生には勉強嫌いな人が多い。おそらく、それが重要とか必要とか考えず、ただ「やらされている」と思っている人が多いからだろう。それは勉強が出来るか出来ないか、そういう問題ではない。

そんなことを考えながら、そろそろ信号が変わるだろうと、自分

の妄想世界から離れて信号機を見る。

だが、信号機は赤から一向に変わる気配がない。気になって周囲を見渡す。

「……！？……止まってる……？」

歩いていた人々や、走っていた車が動きを止めている。そういえば、考え事をしている最中に、周囲の雑音が聞こえてこなかったような気がする。

「時間が……止まった……？」

時間が止まる……なんて、漫画や小説の中の世界だと思っていた。しかし、周りを見渡すと、どう見ても誰も動いていない。夢で見ているのか？と頬を抓るが、痛みが走る。どうやら夢ではなさそうだ。

一体どうしたのだろうか？周りの人に声をかける。

「すみません、どうかしたのですか？」

聖也の声に、人々は反応を示さない。一応、触れることは出来るようだ。

もし時間が止まってしまったらどうするだろう？時間が止められるとしたら何をするだろう？そういうことを、一度は思ったことがあるだろう。そのときはいろんな悪いことをおもいついたりするものだが、実際にこのような場面に遭遇すると、どうすればよいのかわからなくなるものだ。

どうしたものかと、聖也が周囲を見渡す。

「おや、おかしいな。どうして動ける人間がいるんだ？」

不意に後ろから声がした。この状態で、動ける人がいたようだ。

「ああ、そうか、お前が時間を止めたのか」

動いている人物を見る。若干赤みがかったショートヘアの女性だった。すらりとした体格に、英語のロゴが入った白いTシャツにジーンズを身に着けている。まさに夏の女性といった感じが。

「君は、誰？時間を止めた？俺が？」

当然の疑問を投げかける。自分で時間を止められるのであれば、

止める人間はいくらでもいるだろう。

「違うのか？しかし、この状態で動ける……ということは、お前はクロノストライフ時の種族の一人か？」

「時の種族？」

「……知らないと言うことは、普通の人間と言うことか。しかし普通の人間が何故……」

あごに手を当てて考える様子を見せる。目の前で人や車なんかの動きが止まり、混乱しているのはこちらのほうだと言うのに。

「普通の人間……ということは、君は普通の人間じゃないってこと？」

「そう……だな、この状態で動ける以上、説明しておいたほうがいいかもしれないな。私は時の種族の一つ、”時止め”だ。時間を止め、時の調整を行っている」

「時の調整？」

「そうだ。時間と言うものは一定の速さで、一定の方向に進んでいくものだ。しかし、最近人間の干渉によって、その速度や方向が変わっているみたいなのだ。だから、私はその狂いそうな時間を、一時的に調整しているのだ」

何やらよくわからない話が続く。人間の干渉？時の速度？方向？時間の調整？疑問が次々と浮かぶ。

「まあ、一度に説明してもわからないだろう。ただ、一応、この状態で動ける人間として、ある程度知っておいてもらわないとこちらも都合が悪いのですね。ひとまず、私は時間を止めることが出来る、と言うことで理解をしてもらおうか」

「じゃあ、今何も動いていないのも……」

「まあ、そういうことだ。私が時間を止めているのだ」

人も車も、そこらへんにいる猫も動かない状態。風さえも感じられない。こんな状況を、この人……「時止め」と名乗る人物が行ったと言うのか？

「……いや、私が止めたというのは少々違うか。誰かはわからない

が、どうやら人間の干渉があつたようだな。そのせいで私は調整を余儀なくされた、と言うことだ」

「一体、誰の？」

「わからないから君に尋ねたのだ。まあ、わかったかどうか言つてもしょうがない。とにかく、時間の調整が終わつたら、今の状態を解くから、もう少し待つてくれ」

「時止め……って言つたつけ。調整つて一体何をするんだ？」

「別に知つたところでしようがないだろう、人間よ」

「ぼ、僕は栗塚聖也という名前があるんだ！」

わざわざ「人間」と言われたことに対して、聖也は少しむつとした。

「そうか、セイヤ……大そうな名前だな。別に私も『時止め』という名前ではないのだから。さっきも言つたが、『時止め』と言うのは時の種族の一つだ」

「へえ……じゃあ名前は？」

「そういえば、こちらでは名前と言うものを持たなかったな。別に名前なんぞ興味は無いが……そうだな、これからちよつとした付き合いがあるかもしれないから、何らかの呼び方があつたほうが何かと便利だろう。お前が何か決めてくれ」

そう言われて、聖也は少し考えた。名前を考えるのは、比較的得意な方だ。今やっているゲームでつけている主人公の名前も、かつこよさでは自信がある。

「そうだな……『タスト』っていうのはどうだ？」

「タスト？何故だ？」

「時を止める……」タイムスツパー”の略だよ」

「なるほど。……だが、英語で考えるなら『テイスト』あたりが妥当じゃないか？つづりはTime stopperだしな」

「うっ……たしかに……」

ナイスネーミングセンスだとひそかに自画自賛していたが、よりひねつた名前を提案されて少しがっかりした。

「まあ、名前は適当に呼んでくれればいい。さて、そろそろ調整が
終わる頃だし、元の状態に戻すか。おい、時戻し、頼んだぞ」

ティストが声をかけたほうを見ると、空には子供の姿をした人……
「時戻し」と呼ばれたものがいた。

と、急に今まで感じたことの無いような感覚に襲われた。急に体が
軽くなったような、宙に浮くような……

「そうだ、私に会う方法を教えておいてやろう」

意識が遠のく瞬間、声が聞こえた。

「心の中で、”時間が止まればいいのに” と思うことだ」

気がつくと、いつもの夕方の街の中に聖也はいた。止まっていた
人は動き出し、雑談や車の排気音が耳に入る。ここまでこのような
喧騒がはつきり意識できたのは、いつ以来だろうか。

渡るうと思っていた横断歩道の信号を見ると、いつの間にか青に
変わっていた。先ほどのやり取りはやはり夢だったのだろうか？

「……まあいいか。とりあえず、家に帰ってゲームかな」

半分夢うつつになりながら、聖也は夏の帰路を歩いた。

まだ誰も帰宅していないらしく、聖也の家には鍵がかかっていた。
「ただいま」

家の鍵を開け、誰もいない玄関に向かって帰宅のメッセージを伝
える。言葉は誰かに自分の気持ちを伝えるためにあるものだが、挨
拶はその意味合いではなく、習慣的に使われることも多い。別に誰
かに自分が帰宅したという意図を伝える目的でなくても、習慣的に
言ってしまうものだ。

のどの渴きを潤すために冷蔵庫から麦茶を取り出し、コップに注
いで一気に飲むと、聖也は自分の部屋に戻り、汗まみれの制服を脱
いだ。この時期は頻繁に着衣を洗濯しないと気持ち悪くなるのが面
倒だ。脱いだものを洗濯機にいれ、私服に着替える。それから、テ
レビゲームの準備を始めた。

クーラーを効かせ、ゲームのスイッチを入れる。ゲームのオープニングも、はじめはワクワクしたが何度も見た今となってはスキップの対象だ。

「さて、まずはこのアイテムを……」

RPGというゲームは、最終的に最後に待ち構ええるラストボスを倒すことが目的だ。だが、プレイヤーはその目的を果たすためにゲームをするのではない。その間のイベント、ストーリー、戦闘などを楽しむものだ。これらのことを楽しむためには、やはり先に進めなければ話にならない。そのために、プレイヤーは攻略本を購入したり、サイトで攻略情報を探したり、友達同士で情報交換を行う。現在の聖也も、先に進めずに困っている状態だ。

ゲームをするのは、ゲームが楽しいからだ。もちろん、ゲームを楽しむための作業、たとえば経験値やお金稼ぎをすることもあるだろうが、ゲームをしたい人は飽きない限り好きなだけゲームをしていたいと思うものだ。

「まずこのボスの攻撃パターンは……」

早速今日仕入れた情報により、アイテムや武器を駆使し、ボスのHPを削っていく。数分後、ようやく聖也はボスを倒した。

「ふう、これで先に進める。……あ、もうこんな時間か。夕食までに宿題を済ませておかないと」

ボスを倒したら宿題を。これは当初の予定であった。

「あーあ、宿題なんかやりたくないなあ。このまま時間が……」

止まってしまえば、と一瞬思ったが、先ほどの出来事を思い出した。

“私に会いたければ、時間が止まってしまえばいいのに、と思え”
なんとなく、そんなことを考えると厄介なことに巻き込まれるのではと考えた。言葉に出さずとも、考えてしまえば同じことなのだろうが、とりあえずその思考はいったん取り消すことにした。

時止めの調整 その2

次の日の朝がやってきた。昨日攻略したボスのことを、早く友達に報告したかったため、少し早めに家を出た。宿題もばっちり終わらせたため、ひとまず今日一日の学校での活動は安心して出来るだろう。

「おはよう、聖也君」

廊下で小さな髪留めがよく似合う、黒い長髪で背の低い女生徒に声をかけられた。彼女は佐久利風衣香^{さくりふいか}。聖也とは幼馴染で、小さい頃からよく遊んでいた。

「おはよう、風衣香。あれ、教室に入らないの？」

誰かを待っているのだろうか。1年生の教室の前で、ノートを持ったまま、誰かを探すようにきよろきよろしていた。聖也と風衣香は同じクラスだ。

「えっとね、宿題でわからないところがあったから、友達に教えてもらおうと思ったんだけど……」

「ああ、一応終わっているから教えてあげようか？」

聖也は成績がよいほうではないが、今日の宿題程度なら教科書を見ながらでも解けるレベルだった。

「え、いいの？ありがとう」

じゃあ……と教室に入ろうとして振り返ると、複数歩いている上級生の女生徒の中に、何やら見たことがある顔が見えた。

「……！？テイスト？」

服装こそ私服ではなく制服だが、どう見ても昨日見た”時止め”こと、テイストにそっくりな女生徒が現れた。

「え、聖也君どうしたの？テストはまだ先だよ？」

「あ、いや、何でもないんだけど……」

聖也が言葉に詰まっていると、風衣香もその上級生の集団に気がついた。

「あ、佐波先輩、おはようございます」

「あら、佐久利さん、おはようございます」

佐波と呼ばれたティストにそっくりなその上級生の声色は、落着いたお嬢様のような優しい声だった。ティストの男勝りな口調とは似ても似つかない。他人の空似だったか。

「そのノート、宿題か何かかしら？」

「はい、ちよつとわからないところがあつて、これから聖也君に教えてもらおうと思つていたところです」

風衣香がそういうと、佐波は聖也の方を向いてにこりと笑つた。

「あら、じゃあ急がないとね。では私はこの辺で」

そういうと、佐波は聖也と風衣香に軽く会釈をし、今いる教室の後ろの教室に向かつた。

……が、聖也とのすれ違いざまに、

「……セイヤ、昼休みに屋上に来い」

どう考えてもティストの声だった。やはり、佐波という先輩はティストだったのか？

「……聖也君、どうしたの？」

教室に向かう佐波の方をあつけに取られて見ている聖也を不審に思つたのか、風衣香が聖也に向かつて言つた。

「風衣香、さっきの……佐波先輩って……」

「え、聖也君、生徒会副会長を知らないの？」

生徒会副会長！？ティストが！？

「佐波朝里先輩。美人でスタイルがいいし、成績も上位だから女子には人気があるのよ。生徒会でいろんな活動しているから、結構知名度が高いと思うんだけど……」

「そうなの？」

残念ながら、入学してからというものの生徒会の活動について興味を持つたことがないため、生徒会がどのような活動をしていて、どのような人がいるのかわからない。しかし、そこまで知名度が高いということは、ティストはずつとこの学校にいたということだろう

か？

さまざまな思考をめぐらせていると、予鈴が鳴った。

「あ、もうすぐ朝礼が始まってしまふ。早く宿題終わらせないと、授業始まっちゃうよ」

風衣香は聖也の制服の袖を引っ張り、無理やり教室に連れ込んだ。朝礼まではあと十分ほどあるが、宿題をやる時間を考えるとわずかな時間だ。テイストのことは昼休みに本人に聞くとして、とりあえず風衣香の宿題の手伝いを行うことにした。

真夏の昼時は、屋外はもちろんだが、室内でもかなりの高温になる。教室はある程度風通しのよいつくりになっているが、それでもこの高い気温は生徒の気力や体力を奪っていく。特に暑い場所についてはエアコンを設けている教室もあるが、無い教室が多数だ。そのため、昼休みになるとクーラーの効いた教室や他の特別教室に移る生徒も多い。

昼休みが始まってすぐ、聖也は佐波が言っていた通り校舎の屋上にやってきた。さすがにこの暑さでは誰も外に出ていない。コンクリート張りなこともあって、体感温度が高い。それでも、日陰に入れば少しはましに思えた。

「こっちだ、待っていたぞ」

入口から少し離れた日陰の中に、佐波は腕を組んで立っていた。

いや、この口調から、やはりテイストであることには間違いがないだろうが。

「この学校の生徒だったとはな。驚いたぞ」

「佐波……先輩って、やはりテイストなのか？」

「いまさら言わなくてもわかるだろう」

しかし、この口調の違いは何だろう。違和感無く生徒を演じていたと思えば、関係者の前では素の口調に戻ることが出来る。この演技力はアカデミー賞ものだ。

「何でこの学校に？僕が関係者だからか？」

「何を言っている。私はずっとこの学校の生徒だぞ。それとも謎の転校生としてやってくるとでも思ったか？今は2年生だから、お前の1つ先輩だな」

「しかし、じゃあ何でこの学校にいるんだ？」

「別にどうだっていいだろう。時の種族といつても、人間と同じ暮らしをする者だって少なくない。私みたいにな」

テイストの説明によると、時の種族には種族ごと、個体ごとにさまざまな生活を行っているらしい。中には人間の姿をして、人間と同じ生活をしている者、一定の姿を持たず、ふらふらとさまよっている者、他の動物の姿をしている者……。食べ物や生活体系も、人間と同じ食べ物、生活体系をとっている者もいれば、水や草だけを食べている者、まったく栄養源を摂取しない者もいるという。

「へえ、じゃあ”時止め”の中にもいろんな人がいるんだ」

「人、という表現はちよつと語弊があるがな。この学校にも、もしかしたら時の種族がいるかもな」

「そうなの？」

「かもしれない、というだけだ。私だって見つけたわけじゃないかな。ああ、それとこいつを紹介しておこうか。”時戻し”、ちよつと来てみる」

そういうと、テイストが見つめた空がゆがんだように見えた。同時に、少年のような何かが現れた。最初にテイストとであったときに現れた子供だ。

「ん、何だい？こんな時間に仕事かい？」

「こいつは時の種族、”時戻し”だ。もちろん種族の名前だがな。今私は、こいつと時の調整の仕事を行っている」

「そういえば、ずっと気になっていたんだけど、時の調整って、一体どんなことをするんだ？」

聖也は昨日から気になっていた単語を口にした。

「昨日も簡単に説明したが、時間は一定の速度、一定の時間で流れているものだ。しかしながら、何らかのきっかけでその流れの方向

や速度が変わってしまうことがある。それを元に戻し、秩序を保つのが我々時の種族の仕事だ」

徐々に動く太陽のおかげで、日陰の面積が徐々に小さくなる。聖也は、少しだけ建物より身を寄せた。

「まずは”時止め”が時間を止め、時の調整を行う。まあ、私のことだな。その後、”時戻し”が止めた時間分の時間を戻す。つまり、こいつの仕事だな」

そういつて、テイストは”時戻し”を見つめた。

「まあ、おいらは単純に止まった時間の分を戻すだけだけだね」

ここで、聖也は疑問を抱いた。

「あれ、せっかく調整した時間を戻したら意味がないんじゃないか？」

「時間の方向や速度が変わってしまうのは、何らかの原因があるからだ。それらを取り除き、その状態で時間を戻してやることで、時間の狂いの原因が取り除かれた状態の時間が流れることになるのだ。最初に戻ってしまうと、その原因というものがわからなくなってしまうしな」

わかったような、わからないような状態のまま、聖也はなるほど、というような顔をした。

「なんだか難しいことをしているんだな」

「まあ、説明したところで、人間には難しいだろうな。ところで……セイヤは、”時間が止まる”という状態をどのような状態だと考えている？」

「時間が止まる？昨日みたいな状態？」

ふと、昨日の状態を思い出した。周囲の人は誰も動いておらず、自分だけ テイストと時戻しもだが が動いている状態。まさに、これが”時が止まった状態”ということだろう。

「しかし、よく考えてみるとわかるが、自分が動いていると言うことは、自分の時間は止まっていない つまり、時は止まっていない、と言うことにならないか？」

「あ、確かに……」

“時間が止まる”ということは、自分以外の周囲のものが止まることだと言う認識を持ちやすいが、しかしそれは単純に”周りのものが動いていない”だけであって、時間が止まったとはいい切れない。

「しかし、私は”時を止めることが出来る”と言った。さつきも言ったが、自分自身の時間が流れている以上、正確に”時間をとめる”ことは出来ないだろう。そこで、我々は”時が止まる”という状態を定義する必要が出たのだ。それは……」

テイストは組んでいた腕を解き、寄りかかった壁から離れた。

「地球上全生物の一億分の一以下の生物だけが動いている状態、だ」「ずいぶんと狭い定義だなあ」

「何を言っている。周囲の人間が六十人動いていても、他が止まっていれば時が止まったと言っているのだぞ。ずいぶんゆるい定義じゃないか。さらに言うなら、人間が動いていても他の動物が動いていなければ時が止まっていると言っているのだ」

そういわれると、時が止まるというのかもしれないことが無いように聞こえてくる。だが、実際体感した”時が止まった”状態は、本当に時間が止まったような感覚だった。

「まあ、そういうことだ。時を戻すつてのはさらに定義が複雑で……っと、そこまで人間に説明してもなあ」

「な……僕には栗塚聖也という名前が……」

「やれやれ、名前をきちんと言われないと気がすまないのか」

「俺だって”時戻し”なんかいう名前じゃないんだがな。俺も時止めみたいに名前をつけてくれよ」

「セイヤ、お前がつけてやればどうだ？私ときみたいにな」

名前をつけるセンスには自信がある聖也は、テイストの時と同様に心うれしく思った。

「そ、そうか、じゃあ一つ考えてみよう。”時戻し”……タイムをリターンするから、ティタ……」

「やめておけ。それは某アニメの組織の名前だ」

よい名前が思いついたと思った瞬間、ティストに制止された。

「大体その考えで行くと、我々時の種族の名前は全員同じ、しかも”ティ”が最初につくことになるぞ？」

「うう……」

「まあ、お前の意思是尊重して、ここは”ティリット”というのはどうだろう？」

「おう、そいつはなかなかいいな。じゃあ俺の名前は今日から”ティリット”だ」

自分の自信作を否定された上にセンスのある名前を考えられ、聖也は落ち込んだ。

「……っと、そろそろ昼休みも終わるな。教室に戻るか」

「あ、まだ昼ごはん食べてなかった。どうしよう……」

聖也の手には、屋上で食べようとしていたパンと飲み物を入れた袋がぶら下げられていた。

「ん、そうなのか？ だったら私が時間を止めてやろう」

そういうと、ほのかに吹いていた風が止まったような気がした。

先ほどまで聞こえていたグラウンドからの声も聞こえない。

「さあ、思う存分食事を取るがいい。私は一足先に教室に戻るから」

「え、あ、ありがとう……」

ティストが屋上の扉から出たのを見届け、しばらくした後聖也は昼食を取り始めた。

（……それにしても、時間を調整するためにわざわざこの高校に入学するなんて……一体どういうつもりなんだろ？）

などと考えながら手にしたチョコクリームパンをほおばる。弁当を持ってこないときは、何故かいつも甘いパンを買ってくるのが習慣となっている。

つかの間の昼食を終えると、ごみを袋の中に入れ、教室に戻ろうとした。

「おっと、昼食は済んだのかい？ だったらそろそろ時間を戻すよ」

「……！？時戻し……テイリット！ずっといたのかい？」

「まあ、おいらはずっと消えていただけだね。昼食が終わったなら時間を戻すよ」

「え、時間を戻すって……」

「そりゃ、時止め……テイストの時の調整が終わったからな。早く戻さないと」

「ちょ、ちよつとまって、それじゃあ僕の昼食は……」

言おうとした瞬間、不思議な初めてテイストと出会い、”止まった時間が戻る瞬間”と同じ感覚に見舞われた。

気がつくと、暑い日差しにやさしい風が聖也のほおをなでた。同時に、聞こえてくるグラウンドの喧騒。そして昼休み終了を示すチャイムと、聖也の腹の悲鳴。聖也の手には、昼休み前に持っていた物と同じ、パンと飲み物の入ったビニール袋。

「……おなかすいた……」

「なあ、時止め……テイスト、あのことは言わなくていいのかい？」階段を下りるテイストに向かって、姿を消したテイリットが話しかけた。

「別にまだいいだろう。気がついたときは気がついたときだ。聖也は人間だしな。我々のことに突っ込む必要なんて無いだろう」

周囲の人が見れば独り言を呟いているように見えるだろう。が、幸い屋上から降りる階段には生徒の影は無かった。

「それに……いや、まだいいか」

階段を降り終わると、次の授業の先生が教室に入っていく姿が見えた。もうすぐ退屈な授業の時間だ。

時渡りの輪廻 その1

永遠というものは無く、無限というものは無い。永遠というものはただ限りなく長い時間のことであり、無限とは途方も無いほどに大きな数字でしかない。もしあるとしても、それは何らかの条件が必要である。誰かが止めなければ、何かをしない限りは。そのような仮定の下でしか、永遠や無限という概念は生まれない。永遠と思われるもの、無限と思われるものは、想像と空想の世界、そして理論上での出来事でしかない。もしあるとすれば、それは”時間”という概念だけ。

第二章 時渡りの輪廻

金曜日。ホームルームが終わると、生徒たちは一斉に帰宅を始めた。部活をやっている生徒は、いつもどおり部活動に向かうが、次の日が休みということもあり、部活を行っていない生徒は早々に遊びに出かける。

聖也もまた、ホームルームが終わるとすぐさま帰り支度を始めた。が、そこに二人の男子生徒がやってきた。

「聖也、今日どこかに遊びに行かないか？」

聖也よりもやや背が低く、細身の体つきをした、まきぐちしゅんた牧口淳斗がまず話しかけた。手に持ったかばんがやけに軽そうだ。

「そうそう、たまにはカラオケなんてどうだ？」

次いで、大柄で体格がよく、スマートなめがねをかけた山内秀尋ひでひろが話しかける。

「お、淳斗に秀尋か。残念だが今日は金曜日だからな」

聖也は荷物をまとめると、早々に教室を出る素振りをした。

「ああ、そうか。今日は真希ちゃんのところに行くんだな」

「なんだ、せっかく明日が休みだから、徹夜でカラオケでも、と思

ったのだがな」

淳斗が聖也の肩にぽんつ、と手を乗せながら言う。隣で秀尋は、若干残念そうな顔をした。聖也はまたな、と言いながら教室を後にした。

聖也には、いつも妹のようにかわいがっているところがいた。彼女の名は狩根真希^{かるね}。聖也の母親の兄の子供である。

真希が生まれたときからずっと遊び相手をしていたが、真希が小学校三年生のときに病氣にかかってしまい、長期入院を余儀なくされている。改善の見込みがなかなか無く、医師もさじを投げている状態だ。

聖也は、週に一回、真希が入院している病院へ顔を出していた。以前は毎日のように顔を出していたが、高校生活の友達の付き合いもあり、また真希の友達との兼ね合いも会ったため、会いに行く回数が減ってしまった。

聖也は学校を出ると、汗をかくのもかまわずに小走りで真希が入院している病院、時渡総合病院へ向かった。途中、商店街の青果売り場でりんごをお土産として買うことにした。

「いらっしやい、今日もあの子のところへ？」

「うん、おいしいやつをお願い」

この商店街の八百屋は、よく母親の買い物依頼で来るところだ。店主がしっかりと熟したおいしそうなりんごを手にとり、3つばかりカゴにいれ、聖也に手渡すと、あの子にもよろしく、と声をかけた。

病院内に入ると、外気とは打って変わってひんやりとした空気が流れ込む。時折、病院特有の消毒薬のようなにおいが鼻についた。平日と言うこともあり、病院のエントランスは人がまばらだった。よく見ると、60歳以上と思われる老人ばかりだ。受付の近くにあるエレベーターに乗ると、3階のボタンを押す。真希が入院しているのは、377号室だ。

3階の廊下もやはり人はまばらだった。何人かの老人と、そのお

見舞いに来た人、そして看護婦が数人。さすがは大病院だと思わせるような真っ白な壁、鏡のように磨かれた床を進み、聖也はエレベーターから少し歩いたところにある、377号室へ向かった。

「やあ、真希ちゃん、お見舞いに来たよ」

377号室の扉を開けると、たった一つあるベッドの上に、テレビを見ている真希がいた。聖也の声に気がつき、顔をこちらに向けて。見慣れているはずの相変わらずの笑顔に似合う、青いストライプのパジャマがかわいらしい。

「あ、聖也お兄ちゃん」

真っ白に塗られた壁に、真昼の太陽光が差し込む。それでも蛍光灯の光を借りなければ、病室は幾分薄暗い印象を受ける。

「はい、真希ちゃんが大好きなりんごだよ」

袋に入れた手土産をベッドのそばの机に置いた。聖也はその中の1つを手にとると、近くにあったフルーツナイフで手際よく皮をむいていく。

「あいかわらず、手際がいいね」

「そうかな。まあ、料理はそこそこ出来るからね」

むいた皮をゴミ入れの袋に入れ、りんごを切り分けて真希に差し出す。真希は自分のフォークをりんごに刺し、おいしそうに口に運んだ。

「あ、今日のりんごはいつもと違うね」

「そうかな。そういえばあそこのおじさんが、今日はおいしいのが入ったって言ってたな」

りんごを食べ終わると、いつもの通り聖也は真希との会話を楽しんだ。学校のこと、友達のこと、今日の体調のこと。真希と話していると、時間がいつもよりゆっくりと進んでいるような、そんな感覚がしていた。

30分ほど話していただろうか。ふと、聖也は母親から買い物に依頼されていたことを思い出した。

「そうだ、母さんに買い物頼まれてたんだ。じゃあ、そろそろ僕

は行くよ」

「うん、また今度ね」

聖也が病室の扉を開けると、真希は笑顔で手を振って送り出した。それを見ながら、聖也は静かに病室の扉を閉めた。

「さてと、まずはスーパーに行つて……」

来たときとは違い、階段をゆっくり降りながら独り言を呟いていくと、ふと周囲の空気に違和感を覚えた。

「こ、コレは……」

体が軽くなったような、宙に浮くような、何度か感じたことがある、あの感じ。

「……!？」

気がつくと、聖也は真希が入院している377号室の前に立っていた。片手には、来たときに持っていたりんご。

「……あれ、僕は一体……」

きょとんとしていると、廊下の向こうからなにやら見覚えがある顔が近づいてくる。

「おや、そこにいるのはセイヤではないか。どうした？とうとう悪くなった頭を見てもらうために来たのか？」

来て早々、聖也に毒を吐く佐波朝里 ティスト。この言葉に、聖也はすこしむっとした顔を見せた。

「……あのねえ、僕はそんなにあほじゃないのだが……」

「そうか、ならばあのネームセンスはどうにかならないものか」

ふふん、といういやなティストの笑顔を見ながら、聖也はふと肝心なことを聞くのを忘れていたことに気がついた。

「そうだ、さつき時の調整をしなかったか？」

あの妙な感覚は、ティストの時の調整で時が戻る時のものと同じだった。

「ああ、そうだ。ちょうど退屈していたのでな、ここらで一度調整しようと思っていたところだ」

「暇だからって、時間戻したら意味ないんじゃない……」

「ん、まあ、そうだな。まあ、この建物の中を歩き回って見たかったし、30分ほどは時を止めていたかな」

テイストも抜けたところがあるんだな、と思いながら聖也はふととんでもないことに気がついた。

「……どうしたセイヤ。すこし顔が青ざめているように見えるが？」

「え、いや、なんでもないよ。それより、僕はここに用があるから、そういうと、聖也は337号室のドアをかちやりと開けた。

「狩根真希……ねえ」

テイストは、337号室に書いてある在室者を示すプレートを見て、小さな声で呟いた。

「あれ、お兄ちゃんどうしたの？」

真希は先ほど帰ったはずの聖也が戻った、ということ不思議がつているような顔でこちらを見ている。

「あ、いや、ちょっと買い物メモをここに忘れたと思ったんだけど、ポケットに入ってたみたい」

そういうと、聖也はポケットからりんごを買った際にもらったレシートを取り出し、ひらひらと真希に見せた。遠くからは、レシートとはわからないだろう。

「そうなの？」

「うん、じゃあ、ゆっくり休んでね」

そういうと、聖也は不思議がる真希を尻目に、不自然な笑顔を残して退室した。

外に出ると、テイストがずっと病室の表札を眺めていた。ずっと見ていたのだろうか？という目で聖也はテイストの方を見ると、それに気がついたのかテイストも聖也の目を見る。

「おや、早かったな。ゆっくりしていかなかったのか？」

「いや、ちよつと確かめたかったことがあっただけで……」

そついうと聖也は階段の方に向かってすたすたと歩いていった。
「……どうした？何かあったか？」

同じく階段の方に歩きながら、なにやら顔色がすぐれない聖也に向かつてテイストは言った。

「ねえ、テイストはさっき、時間をとめたって言ってたよね」

「でもね、真希ちゃん……さっきの病室の子と、時間が止まっていた間、話をしていたんだ」

「ほほう。しかし、一般人が止められた時間の中を動けるはずが無い。夢でも見たのではないか？」

小さな声で話していたはずだが、静寂な病院の中ではそれもひときわ目立つ。ささやくような声で、聖也はさらに言葉を加える。

「かもしれないと思った。けどね、さっき病室に入ったら、やっぱり」さっき帰ったのに戻ってきた”って反応を示したんだ。やっぱり、止まった時間の中で僕たちは話してたんだ」

「それは妙だな。私が時間を止めている空間で動けるのは、時の種族しかないはずだが……」

テイストもその話を聞き、いろいろと気になることが出てきたようだ。

階段を降り、1階付近になると、患者や看護師の声で徐々ににぎやかになっていく。

「ここではあれだ、その喫茶店に入ろうか」

テイストは目の前にある店を指差して言った。

最近では病院の中にもいろいろなお店があることが多いようだ。単にジュースやパンを売っている購買店のほかにも、病院には似つかわしくないオシャレな喫茶店、居酒屋まであるところもあるらしい。病院側によると、これらの施設は患者のヒーリング効果を狙ったものだというのが、本当のところ真の目的はわかっていない。時刻は夕方5時。この時間は客が一人もいなかった。聖也とテイストは、入口から少し入ったところの席に座ることにした。

「さて、さっきの話だが……」

注文したホットコーヒーを口にしながら、テイストが話を始める。
「やはりマキは時の種族であると考えるべきだろう。お前が時を止めた空間で動けるのは例外だ」

「……そうか……。でも、真希ちゃんは僕が小さいときからよく知ってる。時の種族なんかじゃないと思うんだけど……」

「そういえば、こんな話を聞いたことがある」

飲んだコーヒーが苦かったのか、テイストは自分のホットコーヒーにガムシロップを1つ加えた。

「その種族は”時渡り”と言ってな。文字通りさまざまな時間を渡り歩いている種族だ」

コーヒーを一口飲むと、テイストはコーヒーカップを見て少し複雑な表情をした。「少し甘すぎたか」という声が聞こえてきそうだと。およそ100年前ほどだったか……戦争が頻発していた頃だったと聞く。当時の人間は明日の食料さえ手に入るかわからない状況、もはや自ら死を選択しようとするものも現れていたらしい。ところが、そんな中で、一人の少女は一つの希望を抱いていた。”永遠というものを知りたい”と」

「何でそんな希望を？」

「さあな、よほど特殊な事情があったのだろう。ただ、彼女は10歳の頃に病気を患っていたようで、それに関係があるのではないだろうか？」

聖也の前にあるアイスコーヒーの氷がからんと音を立てる。その音に反応するかのように、聖也はアイスコーヒーを手取る。

「病気……か。真希ちゃんと同じだね」

「そうだな。当時は今みたいに整備された病院なんぞ無かったからな。ただの風さえも、一転して不治の病に変わることさえあったのだ。それはそうとして、その少女の願いを聞き届けたものがいた。それも、時の種族の一人だったようだ。彼 といっぴいのかはわからないが、彼は少女に、ある意味”永遠の命”を与えてしまった。

少女はその後病気が原因で亡くなったが」

「待って、永遠の命なのに死んじゃったの？」

飲みかけたコーヒートをテーブルに置く聖也。たしかに、その矛盾は突っ込みたくもなるだろう。

「話は最後まで聞くものだ。少女は病死したが、その後別の少女の姿に生まれ変わったのだ」

再びコーヒを手に取り口をつけるティスト。先ほどの甘さを確かめるようにちびちびと飲むが、やはりガムシロップを入れたのが失敗したかのような表情を見せる。

「え、生まれ変わったって……」

「正確には、乗り移った、というべきだろうか。彼女はほぼ同じ時代の、同じく病気にかかった6歳の少女にその魂を宿した。そしてまた同じように病死した。そうやって、幾度も幾度も病気の少女に乗り移っては病死していくことを繰り返しているのだ」

「……それが、永遠の命の正体？ そんなことの繰り返しが？」

「まあ、とにかくその少女の願いは叶ったわけだ。おそらく、望まない形だったのだろう。そうやって幾度も時と時を渡っていく時の種族”時渡り”として、今も生きているのだ」

ちびちび飲むのが面倒になったのか、ティストは甘いコーヒを一気に飲み干し、追加のホットコーヒを注文した。

「しかし、それと真希ちゃんの話と、どう関係するのさ」

「さっきも言っただろ。”病気にかった少女に乗り移った”と。その病気の種類も、少女の年齢もばらばらだが、どういうわけか病気にかった少女にしか乗り移っていないのだ。そして、病死しては次の時代、次の少女へと乗り移っていく……」

「じゃ、じゃあ……」

「そういうことだ。病室をちらりと見たが、小学校四年生 10歳くらいではないか？ ならば、時渡りが乗り移る対象としてはぴったりのではないか」

「……」

信じられない、といった顔の聖也。その聖也の表情を尻目に、手にしているアイスコーヒーの冷たささえも忘れてしまったように、グラスを握り締める手に力が入る。おかわりのホットコーヒーを口にするテイスト。

「だが、もしそうだとしたら、セイヤには1つ悪い知らせがあるな」
これ以上何があるというのだ？という顔で、聖也はテイストの顔を見る。

「時渡りは、乗り移った少女が病死したとき、その魂が別の少女に乗り移るわけだが、1つの体に2つの魂が入ることは出来ない。2つも共存してしまうと、それらの意思がケンカしてしまって、体のコントロールが出来なくなるからな。だから、魂の無くなった体つまり、実質的に病死している体に移ることになる」

事態を想像したのか、急に立ち上がる聖也。ガタリ、という音が店内に響き、オーナーも店員も少し驚いた様子だ。

「それって、まさか……」

最後に残っているコーヒーを一気に飲み上げ、テイストは静かに話し始めた。

「……そうだ。もしマキに時渡りが乗り移っているとするなら、……マキはもう既に死んでいる」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4271p/>

時の種族-Khronos Tribe-

2011年10月11日03時18分発行